

文化

歩く前川佐美雄〈中〉

▼民俗隨想

前回、前川佐美雄(一九〇三～一九九〇)の『大和まほろばの記』(角川選書、一九八二)について、海の匂いのする茅ヶ崎で思い起された「大和まほろば」は、坊屋敷町から「あるく・みる・きく」して記録された、佐美雄による民俗隨想であると述べた(2月4日付「新なる民俗通信16」)。

「隨想」とは、「思いつくまま。おりにふれて感じたこと。また、それを書きとめた文章(広辞苑)」。そこに「民俗」を付けることに佐美雄は苦笑するかもしれないが、自宅を起点によく歩き、名所旧跡だけではなく、変わりゆく大和の姿や人々をこまやかに記した本書は、民俗隨想の名にふさわしい一冊と思う。

▼時系列ではない思考回路

しかし『大和まほろばの記』に登場する場所や出来事や人物のうち、時代の判然としないものがかなりある。もちろん、想に日時をいちい求めるものではないが、たとえば次のように

「むかしは」いう道を気まことに歩いたが、戦後は絶えて行なわれ、住宅が建ち、中途半端な町に変わっている。佐保川の小板橋を渡り、菰川堤へ歩いた線路の南がわには三笠中学が建ち、北へ法華寺の村へ通じていた小路は、いま観光バスがはしつつ歩いていたから、平城京の左京二条路の跡である。(略)西へ歩いて行く。(略)国鉄関西線、

な真合だ。

通り越してなおまつすぐに西に歩くが、奈良市街の台地は(この)で終わっている。田圃(たんぼ)の中の野道である。ぶらぶら歩

くことがない。田園道は舗装され、雄が歩いたのは、いつだろうといつ疑問は残る。しかし、このことは直ちに「大和まほろばの記」の評価で、理詰めで考へると問題かもしけない。しかし、このことは直ちに『大和まほろばの記』の評価

を落とすものではなく、むしろ魅力になっており、「春がすみいよよ濃くなる真夏間のなにもいたぎれいな佐保川は、佐美雄が東京から帰郷した昭和八年から二十年までの、いずれかの時

時代が行き来していることは、美雄の思考回路を共にたどることで、いつしか佐美雄の大和散歩に同行している感覚にとらわれる。カバー紹介文末尾の「秀逸の大和隨筆、大和案内」であることに間違いはない。

版社紹介文にあるような「日本の人こころを詠む歌人が、そのひとつの一文で、断りもなく美しい自然と歴史、知己との出会いを綴る」や「失われゆくものへの哀歌」というような大仰なものではない。

魚が泳ぎ、小板橋が渡されて見えねば大和と思へ」と言われているようにさえ思つ。その自由な筆運びは、本書カバーの出

期の佐保川といふことになる。ここでは「戦後は絶えて行く」とがない」という(種明かし)があるが、そうでない箇所も多い。

引用部分の続きを再び実況的な現在形に戻り、さらに国道のバイパス設置に対する苦言、日本初の図書館といわれる芸亭(うんてい)跡の諸説へ及んだあと、

葛城山の麓の忍海(おしみ)で生まれ育ち、二十代の大部分を大都会東京で過ごし、三十年以降は母の里である奈良市中心部に暮らした佐美雄は、「部外者であると同時に同郷人」として奈良の町や村を歩きまわり、さまざまなものを見、多くの人から話を聞き、吸収した。

人々や町の変容記す

▼聞き手、話し手、詠み手
佐美雄隨想の自在ぶりは、佐美雄短歌の成立を考える上でも重要だと思うのだが、話を民俗

で生まれ育ち、二十代の大部分を大都會東京で過ごし、三十年以降は母の里である奈良市中心部に暮らした佐美雄は、「部外者であると同時に同郷人」として奈良の町や村を歩きまわり、さまざまなものを見、多くの人から話を聞き、吸収した。

この隨想には、「聞き手」としての佐美雄と、「話し手」としての佐美雄が入り混じり、さらには「詠み手」として短歌が差し挟まれる。そのことが、『大和まほろばの記』に独自な読後感をもたらしている。

新ら 民俗通信

17 勅 櫛子

まさに歩いたが、戦後は絶えて行なわれ、住宅が建ち、中途半端な町に変わっている。佐保川の小板橋を渡り、菰川堤へ歩いた線路

の南がわには三笠中学が建ち、北へ法華寺の村へ通じていた小路は、いま観光バスがはしつつ歩いていたから、平城京の左京二条路の跡である。(略)西へ歩

くことがない。田園道は舗装され、雄が歩いたのは、いつだろうといつ疑問は残る。しかし、このことは直ちに「大和まほろばの記」の評価で、理詰めで考へると問題かもしけない。しかし、このことは直ちに『大和まほろばの記』の評価

を落とすものではなく、むしろ魅力になっており、「春がすみいよよ濃くなる真夏間のなにもいたぎれいな佐保川は、佐美雄が東京から帰郷した昭和八年から二十年までの、いずれかの時



坊屋敷町から西へ直進した台地の終わり。「田園の中の野道」の面影はない=奈良市芝辻町

（しゃく・ねこ）II歌人、奈良民俗文化研究所事務局長
つづく